

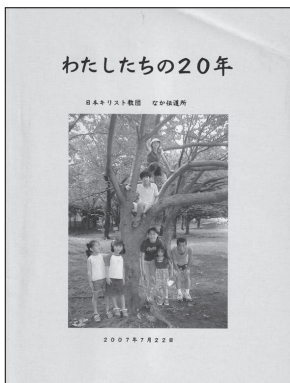
発行所 日本キリスト教団 なか伝道所
〒231-0026 横浜市中区寿町 3-10-13 金岡ビル 203
Tel. (045) 671-1109
振替 00200 - 1 - 47369
E-Mail : naka-ch@hb.tp1.jp HP : http://church.jp/naka/
発行者 なか伝道所/編集委員会 (題字 松橋 順)

宣教方針

- ① 貧しい人々への福音に共にあずかる。
- ② 地域の問題に関わる。
- ③ 諸教会に呼びかけてゆく。

集会 主日礼拝 日曜日 午前10時30分より

なか伝道所の現状について



なか伝道所の二冊の記録集

四月から無牧になったなか伝は、基本的にはメンバーの有志が使信を担当し、礼拝を守っています。代務者やゲストにも協力していただきながら、みんなで礼拝を共有していく中で、これからのなか伝のあり方を模索していきたいと考えているからです。

今回は、七月一九日の礼拝担当者から語られたメッセージへの応答を、伝道所設立当初からのメンバーのお二人に、書いていただきました。

批判的「ふりかえり」から「今後」へ 小笠原公子

私たちのなかまの一人から、「なか伝のこれからを考える」という礼拝メッセージの中で、伝道所のあり方について真剣な問いかけがありました。彼女は、なか伝道所の記録二冊、『わたしたちの二〇年』(二〇〇七年発行。発行者、渡辺英俊)と『わたしたちの三〇年』(二〇一七年発行。発行者、なか伝道所「三〇周年記念誌」発行委員会)を読み、疑問が湧きました。それは、「教会の歴史」として、牧師の活動の詳細な記録が強調される一方、信徒の社会的活動にはあまりふれていないという違和感でした。そして「信徒と牧師の間に権威主義的な関係があるときに、信徒には依頼心が生まれる」と考えたのです。

伝道所創成期、私たちは初期キリスト教共同体を漠然とイメージし、牧師も信徒も共に参加する礼拝とパンさきを喜び、イエスに現された人間へと解放される交わりを願いました。ニカラグアの農民たちが福音書を読み、自由に感想を話し合ったという礼拝にならったのもその試みの一つでした。

やがてなか伝道所を訪れる人が増え、寿地区に住む方や地区の課題に関心のある方、牧師の著書や説教、講演を契機に訪れる方も増えました。使信後の自由な質疑応答も好評でした。「権威は権力とは違う」と語る牧師に納得しない者もいる一方、牧

師への信頼と期待値が高まるにつれ、教会のことは牧師に任せておけばよいという依頼心も強まり、その「権威」を支えてきた側面があるかもしれません。固定された牧師の席を権威の象徴のように感じてか、自分が使信担当の時、その席に座りたくないと言った方もいました。

当時、英俊さんは、複数の分野で先頭を爆走し、私たちは各自の生活と活動の傍ら、その社会的活動の土台である伝道所を大事にしていました。

私は、数年間、英俊さんが共同代表を務める人権NGOで事務局として働きました。雇用関係を別にしても、牧師をフォローする信徒であったことは否めません。

英俊さんは、特に移住労働者の人権課題に中心的に関わり、得意な時も落ち込んだ時も、「伝道所を社会的な「唯一の城」として、伝道所の人々にも依拠していたと思います。そういう人間らしさも、信徒の信頼を集めました。社会階層と自分の足場の認識、聖書とイエスの見方、加害の歴史とキリスト者の責任などを学びました。

しかし、渡辺牧師退職後も、私たちは、自分たちの在り方や、教会観、牧師と信徒の関係性について問い直すことなしに、新しい牧師を迎えたのでした。

「これからの考える」ためには、関わってきた自分たちの「これまで」を振り返り、それを言葉化する省察の作業が必要です。私は今やっと、伝道所を始めたなかまのひとりとして、自分自身の認識と関わりを振り返っています。

とはいえ、途中の数年間ずつ二度の海外

滞在により不在だった期間がありました。

海外で伴侶の難病が発覚し、日本での大手術後、二〇一六年に完全帰国、五月に彼の車いすを引いて伝道所に戻りました。当時主任の石倉牧師は年度末退任が決まり、渡辺元牧師も、牧師招聘に協力しました。翌二〇一七年の堀江有里牧師の招聘が決まり、以前お会いしたことがあった私は、有頂天でした。何かが変わると思えました。

一方、同じ年に渡辺元牧師の聖書研究ワークショップ開催決定。このことが、迎える新任主任牧師にどんなインパクトを与えるかに思いが至らず、私は事務局を担いました。新任牧師赴任直後の五月から、ワークショップが実施されました。

この年から二〇一九年度までの三年間、堀江牧師からは、実に多くの大事な聖書の読み解きと、新しい気づきへの刺激を頂きました。様々気づきながらも本音で正面から課題を指摘し、自らの教会観を語る牧師に、時にうろたえ、時に共感し、自分の足りなさを実感した瞬間の三年間：。「權威」や定式を問い、真実を諦めず求め続けるラディカルなキリスト者の困難と楽しさを垣間見せて頂いたような気がします。しかし堀江牧師には、経済的にも態勢的にも心理的にも、多くの負担ををかけてしまいました。

堀江牧師が私たちに提示した私たちの課題は未だ目の前にあります。教会の目指すこと、牧師と信徒、信徒同士の関係…。神のもとにある人間同士として、どう向き合っていくのか、答えを模索中です。

信徒が牧師を「良いお話や慰めや励まし

を与えてくれる存在」と考え「その恵みを受けられるために礼拝に集う」ことだけを望むとすれば、牧師は消費される対象となり、教会は市場となってしまふ。イエスを十字架につけたのは民衆でした。牧師は俳優ではなく、信徒は観衆ではなく、生活の場の中にある教会で出会い、共に聖書を通しての交わりに招かれたなかまです。

力関係にある「教会」ではなく、イエスの生きざまに表された神の思いを、本来的な姿として追い求める人間たちの「教会」になりたいのです。

さて、「問いかけ」のもう一つは「解放の神学」との関わりについての指摘です。「横浜の寄せ場・寿町で、地域の問題と

HP)

「解放の神学」という看板を掲げながら、いつの間にか、權威主義とそれを支える依頼心に慣れきってしまったのではないかと。私たちは、「解放の神学」をどうとらえているのかと、問われたのです。

ブラジル滞在中の二〇一五年、私は、小井沼眞樹子宣教師や牧野時夫さんと共に「ラ・キ・ネット」(ラテンアメリカキリスト教ネットワーク)の研修旅行に参加し、佐々木治夫神父にお会いし、MST(土地なし農民運動)の女性たちの国際女性デー集会に参加して見た「解放の神学」の姿に、

深い印象を受けました。そして、今回なまの次の言葉に衝撃を受けました。

わたしたちが社会問題を考える上で、人の持つ依頼心や權威勾配、絆(きずな)と絆(ほど)し、というものの中で「権力」が生まれる。ひとを傷つけ抑圧の中に押し込める「権力」というチカラに抗(あらが)っていくことが、私の中での「解放の神学」であると思っています。

私にとって「解放の神学」とは何か、まだ言葉にできていませんが、これが私の「現場」、私の「解放の神学」ですと、心底から語れる日をめざしたいと思っています。

■現在の礼拝

六月、二か月ぶりに伝道所に集まったなかまが礼拝後近況を分かち合いました。再会の嬉しかったこと！ 礼拝再開に際し、専門知識をもった人が必要な感染対策を整え、手作りの「飛沫防止パーティション」も設置！ 同時に、自宅からの礼拝参加の設定もされ、礼拝は隔週ごとですが、遠方の会員もオンラインで共にしています。使信は運営委員や伝道所のなかまと、また代務者を受任してくださった横浜磯子教会の中村清牧師と、ゲストの協力により、みんなで礼拝を守ります。伝道所の「これまでに」をふまえ、「これから」の幻をみんなで模索していきます。今後もなか伝道所を見守って頂ければ幸いです。

風景

横浜をはじめ訪ねたのは、いつだったかと思いきすと、学生時代、船で米国に帰る女性の宣教師の方を見送るために横浜の港に来たのがはじめてだった。

その横浜にこうして住むようになって早や十三年がすぎた。日々は早く過ぎていく。最近自分の住む「希望ヶ丘」の地形を興味をもって見るようになった。

近所の奥さんの話では、この辺りは小さな山を切り開いて「まち」ができたという。私は四階建ての団地の四階に住んでいるので、とても見晴らしがよい。ペランダの向こうに同じ高さに「春の木神明社」が見える。そこは相模鉄道沿線で最も高所の神社とのこと。そのタブの木は横浜市の名木古木指定とのことなど、地形や木々に興味がつきない。

こうして私は、横浜のことを知っていくのだなあとと思う、この頃です。

(佐々木五律子)

【代務者就任のお知らせ】

八月から、横浜磯子教会の中村清牧師に代務者を引き受けていただきました。中村牧師には説教や運営委員会への出席などご協力をいただき、支えられています。磯子教会の皆様にも、感謝いたします。

二〇二〇年七月一九日の
メッセージを受けて
鈴木弘美

二〇二〇年一月頃から私のころは揺れていました。牧師が去ることになったからです。何度も去らないでほしいと頼みましました。堀江有里牧師（以下、有里さん）との三年が私を成長させてくれたからです。三年前、考えて話し合つて（たつもりです）有里さんに来てもらいました。有里さんは礼拝が終わるとよく「あゝ、壊している」と言っていました。確かに私は壊れたのかもしれない。何故か心が揺れているのを感じていました。そして有里さんは「壊しちゃった」と謝るのです。そういう繰り返しの中で私自身の細胞が入れ替わっていくのを感じていました。すごく楽しい三年間でした。反面、牧師はたくさん苦しい思いをしていることも知っていましたので、私のころは揺れていました。

るところです。やっと考え始めました。以下、メッセージに応答する形で考えてみました。

なか伝の過去から 牧師の権威と信徒の依頼心を見る

なか伝の記念誌「わたしたちの二〇年史／三〇年史」の年表を見ると牧師が〇〇してきた、が強調されて読み取れる。の指摘：

一九八七年 渡辺牧師夫妻フィリピンから帰国、中村町に借家を借りて集会室を設営

なか伝の設立は、渡辺英俊牧師（以下、エイシユンさん）と仲間とで横浜市南区中村町に中村橋伝道所を作ったことから始まりました。エイシユンさんがフィリピンに学びに行っている一年を準備期間とし、数人の仲間が集まってフィリピンのエイシユンさんとも情報交換して設立準備をしました。中村橋伝道所は私たちが準備してエイシユンさんが帰国した年に設立しまし

た。確かに年表では、エイシユンさんが設立した伝道所に私たちが加わったと解釈できますね。

一九八九年 「カラパオの会」の中心において、渡辺牧師も忙殺・・・

一九九〇年 渡辺牧師NTBテレビに出演・・・

この年表表記は、なか伝の活動が掲載されているのではなく、牧師の活動が掲載されています。私はこの事実について「おかしい」と声を上げることもせず、気付きもせずにスルーしていたことに気づかされませんでした。指摘された通り、権威主義を支える依頼心が形として表れています。

なか伝は本来、牧師の活動の場ではなく、ここに集うみんなの活動が公開される場であり、そこでイエスの学びができる場として設立しました。しかし一人ひとりの心の片隅にある「牧師の権威と信徒の依頼心」が、牧師の活動からイエスを学ぼうとしていた事実気づかされ、今更ながら自分が

恥ずかしくなりました。（そうしている方が楽な自分もいました）

私は、中村町で在日韓国朝鮮人差別を学び、そこに関わりつつ、中村橋伝道所の設立に参加しました。二〇歳代から関わった人権に対する学びは、精神障がい者の人権問題に心を動かされ、転職しました。

ことぶきの街には、精神障がい者や寿地区センターでの学びなどで一九八五～六年から時々顔を出していました。障がい者が多く暮らす街でもあり、作業所作りや就労の場づくりに参加したこともありました。街には、寄せ集められた魅力的なプランや形が存在していました。（今、私はことぶきの街での活動はしていません。それはどういうことなのか、向き合わないといけないです。別途考えます）

さて、発題の後の分かち合いの時に「私たちは、『福祉作業所』や『木菜家』などで食事作りや交わりをしてきた。決して牧師だけが活動していたわけではない」と発言がありました。日常の職場がことぶきの街にある方、パトロールや炊き出し、昼食づくりのボランティアに参加する方、地区センターでのボランティアを続けている方など、今も多くの働きがあり、その中でイエスを学んで発信している仲間たちです。このようになか伝の多くの方はそれぞれに街の大人や子どもたちといっしょに笑い、泣き、怒り、抗議し、道を歩き、作って食べて過ごしています。そして学び、発信しています。牧師の行動にイエスを学ぶのではなく、なか伝に集う一人ひとりの発信でイエスを学べます。しかし、心の片隅にある微かな権威への依存は、純粹な歩み

三密つて何色？

（近所の年長組の男児とママの会話）

えーとねえ

男児

「ねえ。サンミツって何色？」

ママ

「何色って… 色なんてないよ」

男児

「あるんじゃない？ あるはずだよ」

ママ

「どうして？」

男児

「だって、あんみつは白と黒があるでしょ。」

だからほるはずだよ

をかき消すくらい、牧師に依存してきたということに気づきました。

そして、これから

「わたしたちが何をして、何をしてこなかったのか」という問いについて

三月、私はなか伝の有志二人と一緒に、牧師がいなくなった礼拝をどうしよう、と考える機会を与えられました。話し合っているときは、原始教会はどうだったのか、そもそも教会ってあった方がいいのか、とか、何をしたいの？教会で、だったら別のコミュニケーションでもよいのでは…でも教会。それって何を期待しているの？

期待しているの？ 疑問や問いが沸いてきて、イエスは礼拝に出ているの？とか、釜ヶ崎では… じゃあ、ことぶきにある教会の聖書の読み方ってどんな風になるんだろう。など。

まず運営委員会で素案を話しました。ここでは、全否定!!という印象。(個人が感じる印象なのでそうではなかったかも…です) 落ち込んだ時もありました。前回の『なかだより』では、その素案をもとにみんな話あった事柄が掲載されています。今更ですが、話をし、疑問を質問し、思ったり感じたりしたことを発信すること。そうすることで物事が形作られていく。それがとても豊かな時間になること。話し終

まど

「新型コロナウイルス」という聞きなれない言葉が始まった二〇二〇年。それが瞬く間に拡がり、クラスター・在宅ワーク・ソーシャルディスタンス・三密などの言葉が氾濫。四月には在宅礼拝という事態に。無牧のなか伝は牧師と相談することも出来ず運営委員は大奮闘！ その中で例外が一人、他ならぬ私である。がん検診で即入院・手術、術後六回の抗がん剤投与との診断。半年間は本来の役目も他の方にお願

「独居老人の孤独食」の心配。調理者の負担を軽くするため調理パンの日やおにぎりの日を試したものの、それはそれで人手と労力がいる。私も継続を願うが、この先どれ程やれるか？ その上「密集・密着・密接」を避けての飲食だと「愛餐問題」は一件落着とせざるを得ない。

もう一つの課題は、会堂の広さと家賃や維持費の問題。現在ビルの二室を借りているが、これを一室に縮小する案を臨時総会を開いて決める方向へ。

主が示された道なのだと思えたいが、会話の乏しい孤食や体調不安の方、子どもたちに対応する部屋を失うことに痛みや疑問、自分の無力さを覚える。

(武井昭代)

「愛餐を継続するか否か」の課題では、調理担当の辞退者増、男女の偏りの不公平感、

わった後は、すつきりした感じとモヤモヤした感じの時とありますが、積み重ねが大切だと実感しています。

「わたしたちが何をして、何をしてこなかったのか」の問いに、私たちは牧師の話だけを聞いて、話し合っただけで、自分たちで発信してこなかったと思えました。牧師に依存してきた私は牧師の提案に耳を傾け、すぐに「そうしましょう。賛成です」と言っていましたし、総会でも委任状で済ませてしまうことが多々ありました。今更ですが、何をしてきたのでしょうか、私は…

三月、新しい礼拝の形を考えたときのことを改めて思い出します。そして、この執筆の機会を与えられ、何が大切なのか少し整理できました。

話し合ったり考えたりしなかった分、とても楽だったことも理解した上で、これからはもっと話をして、考えて、悩んで、見つけていく…。また話を重ねる中で考えがまとまっていく行程を楽しもうと思っています。そうしていくことでなか伝はきっと興味深い伝道所になる、そんな気がしてきました。

編集後記

「学童」の子どもたちが楽しみにしている秋の行事はすべて中止になり、クリスマス会も縮小を余儀なくされています。

三密を避けて子どもたちとどのように繋がってけるのか？ 難しさを実感しています(幸)